

育児期の父母における家庭と仕事の関連 —インタビュー調査を通して—

伊藤 里菜*・池田 浩之**

本研究では、育児期の父母の仕事・家庭間のポジティブな影響に焦点を当て、その質的な実態を明らかにすることを目的とし、就学前の子どもを持ち、就労している男女6名(男性3名, 女性3名: 平均年齢34.0歳)を対象とした質問紙調査およびインタビュー調査を実施した。

仕事観, 仕事と家庭の多重役割のスピルオーバー, GHQ30, 主観的幸福感を測定し, 家庭と仕事でのやりがいや大変なことについてインタビュー調査を実施した。その結果, 男性では仕事, 女性では家庭に重きを置いて生活していることが伺えた。また, 短時間勤務をしている女性において, 家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー, 仕事から家庭への補償の得点が高く, 家庭でのネガティブな状況を仕事で埋め合わせる傾向があることが示された。さらに, 家庭での感謝についての言及から, 家庭で配偶者から受ける感謝が, 育児期の父母における家庭と仕事の両立において鍵となる可能性が示唆された。

キーワード: スピルオーバー・補償・育児期・主観的幸福感

序論

日本における多重役割の現状

近年日本では, 共働き世帯数が年々増加している(内閣府, 2017)。また, 第1子出産前後に女性が就業を継続する割合は右肩上がりとなっている(内閣府, 2017)。このように, 多くの人が母, 妻, 労働者といった複数の役割を持ち, 多重役割を担っている。内閣府(2012)によると, 仕事と生活のバランス確保が幸福感を高めると回答している人は半数に上り, 仕事と生活のバランスを重要視する人は多い。しかし子どもの体調不良時に妻も夫も重要な仕事があり, 休みにくかったと回答した者は79.5%にも上り(久保, 2012), 多重役割による困難があることがうかがえる。このような状況を克服するため, さらなる研究が望まれる。

多重役割に関する代表的モデル

役割間の関係を捉える枠組みの代表的モデルとして, 一方の役割における状況や経験が, 他方の

役割における状況や経験にも影響を及ぼすとする「スピルオーバー(流出)」, 一方の役割での不満を他方の役割での満足により埋め合わせるとする「補償」, 仕事役割と家庭役割の間で役割間葛藤が生じるとする「コンフリクト(葛藤)」, 両方の役割が独立しているとする「分離」が挙げられる(福丸, 2001)。このように4つのモデルがあるが, 先行研究では多重役割のネガティブな影響について扱ったものが多い(小堀, 2010; 小泉・菅原・北村, 2001など)。本研究では, 特に仕事と家庭を両立することのポジティブな面に着目し, スピルオーバーと補償の2つを取り上げる。

精神的健康度との関連

先行研究では多重役割と精神的健康度の関連が指摘されており, 共働き世帯の母親では, 仕事・家庭間のポジティブ・スピルオーバーが抑うつ度を低減すること(福丸, 2001)などが明らかにされている。また, 家庭役割から仕事役割への補償は父母ともに心理的健康度の高さに関連しているということも示されている(福丸・小泉, 2003)。

夫婦間での関連と差異

前述したのは, 個人内での役割間の関係である。

* 兵庫教育大学大学院学校教育研究科

** 兵庫教育大学発達心理臨床研究センター

また先行研究では夫婦間での関連も指摘されている。例えば、仕事と家庭の両立のネガティブな面・ポジティブな面の双方が夫婦間で関連すること（黒澤，2011）が示されている。

さらに、夫婦間では影響を与えるだけでなく、その差異も見られ、夫よりも妻の方がネガティブ・スピルオーバー、ポジティブ・スピルオーバーを強く認知していることが示されている（福丸，2001）。ここから、個人内の関係だけでなく、夫婦間での関連や差異についても見ていく必要があると思われる。

以上より本研究では、家庭と仕事という役割間のポジティブな影響を、尺度を用いて測定するとともに、インタビュー調査によって、育児期の子どもを持ちながら就労している人の質的な実態を明らかにすることを目的とする。

方法

被調査者と実施時期 就学前の子どもを持ち、就労している男女6名を対象とし、2017年9月から2018年1月にかけて実施した。

手続き 縁故法により、調査対象者となる男女6名を選定した。調査は調査者の通う大学内の教室、被調査者の職場の面談室といった、静かな部屋で実施した。初めに質問紙への記入を求め、その後30分程度の半構造化面接を実施した。

調査項目

質問紙 1. フェイスシート 2. スピルオーバー尺度¹（福丸，2001）3. 主観的幸福感尺度⁴（伊藤・相良・池田・川浦，2003）4. スピルオーバー尺度²（小泉・福丸・中山・無藤，2007）5. 仕事観尺度³（福丸・無藤・飯長，1999）6. The General Health Questionnaire 30項目版（以下、GHQ30）⁵（大坊・中川，1985，1996）

（※上付きの数字¹²³⁴⁵は表1と対応）

インタビュー調査 初めにフェイスシートを見ながら、家族構成や配偶者について聞き取り、その後仕事や家庭、その両立について質問をした。質問をしていく中で気になった点についてはさらに詳しく聞いた。質問項目は以下の通りであった。

1. 仕事できつい・大変だと思うのはどんなときか。2. 仕事で疲れたときやきついときに、どのように対処しているか。3. 仕事で楽しいと思う・やりがいを感じるのはどんなときか。4. 家庭できつい・大変だと思うのはどんなときか。5. 家庭のことで疲れたときやきついとき、どのように対処しているか。6. 家庭で楽しいと思う・やりがいを感じるのはどんなときか。7. 仕事と家庭の両立で、大変だと思うのはどんなときか。8. 仕事と家庭の両立で、大変なときにはどのように対処しているか。9. 仕事と家庭の両立をしていて、よかったと感じるのはどんなときか。

倫理的配慮 調査の概要と目的、回答は自由意志に基づくものであり、中止可能であること、調査内容は研究にのみ使用し、個人が特定されるかたちで発表されることはないこと等を記した書類を事前に配布し、同意が得られた者に調査を実施した。

結果と考察

6名の調査対象者の平均年齢は34.0歳（年齢範囲28-42歳）であった。子どもの人数は平均2.0人、末子年齢は平均1.5歳であった。調査対象者の配偶者は全員就労していたが、2名は育休中であった。調査対象者のうち5名は常勤、1名は非常勤であった。調査対象者の週の就労時間は平均42.9時間であり。最も少ない者で15時間、最も多い者で80時間であった。

尺度得点の素点を表1に示す。表1より、スピルオーバー尺度について、仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー、仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スピルオーバーにおいて男性の方が女性よりも得点が高かった。先行研究（福丸，2000）では男性よりも女性の方がネガティブ・スピルオーバー、ポジティブ・スピルオーバーともに多く感じるとされているが、今回の調査ではそのような傾向はみられなかった。しかし、福丸・中山ら（2006）では過重労働が仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーと関連することが示されているため、就労時間の長い男性において

表 1 尺度得点と先行研究の得点

	ID1	ID2	ID3	ID4	ID5	ID6	全体平均	男性平均	先行研究 男性	先行研究 女性平均	充実・自己実現高、 制約・負担低群	充実・自己実現低、 制約・負担高群	
	男性	女性	女性	男性	女性	男性				女性			
スピルオーバー尺度(福丸, 2001)¹													
家庭役割から仕事役割へのネガティブ・スピルオーバー	2.83	2.67	4.33	2.83	3.00	1.33	2.83	2.33	1.99	3.33	2.38	3.58	2.28
両役割間のポジティブ・スピルオーバー	4.83	3.17	4.00	3.33	4.83	4.33	4.08	4.17	3.21	4.00	3.54	4.42	3.61
仕事役割から家庭役割へのネガティブ・スピルオーバー	2.67	3.00	3.00	4.33	2.00	3.67	3.11	3.56	3.00	2.67	2.94	2.83	3.67
スピルオーバー尺度(小泉・福丸・中山・無藤, 2007)²													
家庭から仕事へのポジティブ・スピルオーバー	5.00	3.57	4.14	2.86	4.86	4.57	4.17	4.14	3.50	4.19	3.56	4.57	3.67
仕事から家庭への補償	4.60	3.40	5.00	2.00	4.00	3.00	3.67	3.20	2.05	4.13	2.55	4.80	2.80
家庭から仕事への補償	5.00	3.00	4.40	4.00	4.60	3.60	4.10	4.20	3.77	4.00	3.99	4.70	3.53
仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー	3.83	3.67	2.17	3.00	2.33	4.17	3.19	3.67	2.87	2.72	2.8	3.00	3.61
家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバー	3.33	3.17	3.50	3.00	3.67	4.00	3.44	3.44	2.30	3.44	2.38	3.42	3.39
仕事から家庭へのポジティブ・スピルオーバー	5.00	4.00	2.75	2.75	5.00	3.25	3.79	3.67	1.95	3.92	4.12	3.88	3.33
仕事観尺度(福丸・無藤・飯長, 1999)³													
充実・自己実現	3.67	2.78	3.33	2.78	3.00	3.00	3.09	3.15		3.04		3.50	2.85
制約・負担	1.50	2.00	1.75	2.00	2.00	2.50	1.96	2.00		1.92		1.63	2.17
仕事中心	2.33	2.00	2.33	1.33	1.00	1.67	1.78	1.78		1.78		2.33	1.67
経済的手段・義務	4.00	2.75	3.00	3.75	3.75	2.75	3.33	3.50		3.17		3.50	3.08
主観的幸福感尺度(伊藤・相良・池田・川浦, 2003)⁴													
	43.00	33.00	37.00	42.00	42.00	35.00	38.67	40.00	35.24	37.33	34.85	40.00	36.67
GHQ30⁵													
	1.00	4.00	9.00	0.00	15.00	4.00	5.50	1.67		9.33		5.00	2.67

※スピルオーバー尺度(小泉・福丸・中山・無藤, 2007)の『先行研究女性』の得点は常勤就労をしている者の平均を記載

仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバーが高くなったと考えられた。

反対に、仕事から家庭への補償では男性よりも女性の方が得点が高かった。インタビュー調査では、女性においては「子どもとの世界ばかりだとちょっとしんどい (ID2)」など、家庭で長時間過ごすことへのネガティブな語りがみられたが、男性においては「子どもたちと一緒に過ごせるのはとても幸せ (ID1)」など、家庭にいること自体が楽しいといったポジティブな語りが目立ったことから、女性では家庭のストレスを仕事に行くことで発散することがあるが、男性においてはそのようなことは少ないのかもしれない。インタビュー調査の結果については、後程詳しく記載する。

続いて、仕事観尺度において、充実・自己実現と制約・負担の得点より、被調査者を充実・自己実現高、制約・負担低群と充実・自己実現低、制約・負担高群の2群に分類した。充実・自己実現高、制約・負担低群は2名 (ID1,3) 充実・自己実現低、制約・負担高群は3名 (ID2,4,6) であった (ID5は充実・自己実現低、制約・負担高群に分類可能だが平均に近いので分類しなかった)。群ごとに見ると (表1)、両役割間のポジティブ・スピルオー

バー、家庭から仕事へのポジティブ・スピルオーバー、仕事から家庭へのポジティブ・スピルオーバー、仕事から家庭への補償、家庭から仕事への補償では充実・自己実現高、制約・負担低群のほうが得点が高かった。ここから、仕事が充実しており、自己実現となると考えていて、負担や制約をそれほど感じていない人では、そうでない人よりも仕事・家庭間のポジティブな影響を多分に感じているということが考えられた。家庭から仕事、仕事から家庭というどちらの方向性においても得点が高かったことから、仕事と家庭が密接に関連しているということが分かる。本調査では仕事観がスピルオーバーや補償に影響しているのか、スピルオーバーや補償により肯定的な仕事観を持つことができるのかという方向性は明らかにすることができないが、仕事・家庭間のポジティブな影響が多い人では、仕事を肯定的に捉えていることが明らかとなった。

一方精神的健康度については、主観的幸福感、GHQ30ともに自己実現高、制約・負担低群のほうが高いという結果となった。主観的幸福感が高いほど、GHQ30は低いほど、健康度が高いことを示す。当初は充実・自己実現高、制約・負担低群のほうが仕事を肯定的に捉えており、精神的健

康度が高いのではないかと考えていたが、仕事観によるはっきりとした違いはみられなかった。その要因として、本研究では調査対象者が6名と少なく、1人の得点により平均点が大きく変わってしまうことが考えられる。例えば、ID4は充実・自己実現低、制約・負担高群であるが、GHQ30は0点と極端に低い。自分の精神的、身体的な不調に気づいていない、もしくは考えないようにしている可能性も考えられるため、得点と実際の状態が一致していないということもあり得る。そういったことにも留意しつつ、健康度については解釈する必要があると思われた。

また、インタビュー調査において、仕事で大変なことについて「しょうがない」と受け止める発言 (ID1,3) がみられたことから、客観的に見た実際の負担は大きいものの、仕事をしなくてはならないことであると割り切って考えることで、仕事観が肯定的なものとなっていることも考えられる。今後、仕事観と健康度の関連についても十分に調査する必要があると思われた。

続いて男女間で得点を比較すると (表1)、主観的幸福感では女性の方が、GHQ30では男性の方が得点が低く、男性の方が精神的に健康であることが示された。伊藤・相良ら (2003) では主観的幸福感に男女差はみられなかったため、先行研究とは異なる傾向が示された。本調査ではID3, ID5のGHQ30の得点が他の調査対象者と比較してかなり高いため、その2名によって女性の平均点が高くなっていると思われる。この2名は就労時間を調整して育児・家事を行っていることから、育児や家事による肉体的・精神的な疲労があるのかもしれない。パートタイム就労をしている母親では、フルタイム就労をしている母親よりも育児関連ストレスが高いことが示されているが (初塚・石田, 1996)、本研究においても同様の傾向がみられた。

続いて、先行研究の得点と本調査の得点を比較すると (表1)、本研究の調査対象者のほうが男女ともに両役割間のポジティブ・スピルオーバーの得点が高かった。小泉・福丸ら (2007) の尺

度で見ると、仕事から家庭へのポジティブ・スピルオーバーでは先行研究よりも得点が低い、家庭から仕事へのポジティブ・スピルオーバーでは先行研究よりも得点が高い。ここから、家庭から仕事へのポジティブ・スピルオーバーの高さが両役割間のポジティブ・スピルオーバーの高い得点に結びついていると思われる。

また、女性において、双方の尺度で家庭から仕事へのネガティブ・スピルオーバーの得点が高かった。仕事から家庭への補償の得点も高いことから、本調査の対象者では、家庭から仕事へのネガティブな影響を多く認識しており、仕事は家庭におけるネガティブな影響を埋め合わせるものとして機能していると思われる。仕事から家庭への補償の得点が高い要因として、本調査で回答した女性では育児のため仕事の時間を短縮している者が3名中2名であったことが挙げられる。個々の得点をみていくと (表1)、女性 (ID2,3,5) のうち仕事から家庭への補償の得点が高いのはID3, 5の2名である。この2人は仕事の時間を短縮しており、仕事の内容も事務等に制限されている。インタビュー調査においても2名とも、仕事の内容自体は大変ではないという主旨の発言があったことから、仕事の内容や時間を調整し、仕事自体が負担にならない働き方を選択しているといえる。そのため、仕事に行くことで気持ちを切り替えられるといったポジティブな面を認識しやすいのではないだろうか。ここから、仕事から家庭への補償の高さは、働き方を自分で選択し、変更できる場合に高まるのではないかとと思われる。そのため、非常勤勤務やパートなどでは仕事から家庭への補償が高くなるのではないかと予想される。しかし、家庭との兼ね合いで働き方を選択するには、働いている会社の環境が大きく影響する。就労時間や職務内容について柔軟な選択ができず、望まない働き方を続けざるを得ない場合には、仕事から家庭への補償の得点は下がることが予想される。非常勤勤務やパートであったとしても、本人は辞めたいが辞められない場合、本当は就労したくはないが、家計のために就労せざるを得ない場合があ

ることを考えると、個々の背景に沿って考える必要があると思われる。

続いてインタビュー調査の結果を示す。調査対象者全員に共通する質問とその回答を表2に示す。

インタビューにおいては、「仕事が8, 9で家庭が1くらい (ID1)」、「(夫が仕事から帰ってくるのは) ほぼほぼ9時は絶対超える。(中略)9時10時になってくると(子どもが) もう寝てるから (ID2)」、「夫は仕事で忙しくて (ID3)」、「(自分自身が) 仕事に重きを置いて、生活してるのはやっぱり間違いなくて (ID6)」, といった夫の就労時間が長く、仕事中心に生活を送っていることを示唆する語りが多くの対象者から得られた。また、「主人が、基本(家事を) 手伝ってくれはしないので (ID2)」、「(家事や育児の比率は) 平日だったら私がほぼ、8, 8くらいですかね (ID3)」といった、家事や育児を妻が中心として行っていることを示唆する語りが得られた。内閣府(2018)においては、30代、40代男性では週の就労時間が60時間以上である割合が約15%と他と比べ高く、6歳未満の子どもを持つ夫婦の家事・育児関連時間は妻では454分に対し夫では83分とかなり短いことが示されている。本調査においても同様に、男性は仕事中心、女性は家庭中心に生活を送っているということが示された。

そして、「家にいる時間が最近少し増えてるから、奥さんの仕事をね、家事とか見てるけど (ID1)」、「奥さんは、(家事は) 本来自分がすることって思ってくれて (ID6)」、「家族とか家がぐちゃぐちゃになると、なんのために働いてるのかわかんなくなるんですよ。家族が1番大事なんだなって (ID5)」というように、妻、夫それぞれが「夫は仕事、妻は家庭」という伝統的性役割観のような考えを持っていることがうかがえた。男性は仕事が忙しく、家庭に時間を割けないという物理的な要因とともに、それぞれが持つ性別役割分担への考えという心理的な要因もあるのではないかと考えられた。石(2015)によると、フルタイム就労をしている母親において、父親の平等なジェンダー観が母親が認識する仕事から家庭へのネガ

ティブ・スピルオーバーを減らし母親の育児不安とGHQを低減することが示されている。このように、配偶者、本人の性役割観によって精神的健康にも影響があると思われるため、それぞれが持っている考えにも焦点を当てる必要があると思われた。

また、家庭での楽しさ・やりがいについての質問に対し、男性では「子どもたちと一緒に過ごせるのはとても幸せ (ID1)」、「見てるだけで楽しい(中略) 一緒におれたらそれでええかな (ID4)」、「楽しいよね、家おんの(中略) おるだけで安心するし、話聞いているだけで幸せやなあと思うし (ID6)」といった子どもや家族といること自体が楽しく、幸せなことであるという意見が目立った。女性では、「子どもにやっぱり、いろいろと成長してできるとことかが増えてきたりとか (ID2)」、「ちょっと会話して楽しんだりとか(中略) いろんな会話ができるようになったりすると、まあ成長を感じますし (ID3)」、「自分も成長できるし、子どもの変化も見れて嬉しい (ID5)」といった子どもの成長にやりがいを見出す発言が多く見られた。これは、女性のほうが子どもと過ごす時間が多く、子どもの教育やしつけを担っているためにみられる意見なのではないかと考えられた。また女性では、「子どもとの世界ばかりだとちょっとしんどい (ID1)」、「家で子どものことと家事ばかりやっているとそれはそれでちょっとしんどい (ID3)」といった、子どもと長く過ごすことへのネガティブな意見がみられた。初塚・石田(1998)では母親では父親と比べ育児関連ストレスが高い傾向にあることが示されており、育児期の母親では、家庭に重きを置いて生活することで子どもの成長に喜びを感じる一方、育児によるストレスも多く感じていると思われる。男性では子どもと過ごす時間が限られているため過ごすこと自体が楽しい、と感じているが、女性では子どもと過ごす時間が長く、教育を担っていることで、子育てによるストレスを感じやすいのではないだろうか。また佐藤(2013)では母親において、子ども・子育てへの肯定感とストレスに負の相関

があることが示されており、育児ストレスを感じるとともに子どもや子育てへの肯定感を持ちにくくなることが予想される。育児や家事の多くを女性が担うことで、子どもの育ちに対してより敏感になり、ストレスを感じる母親も多いのではないかと考えられた。

今回、複数の対象者から「(妻が行った家事に対して)旦那が感謝をしてくれないときはすごく嫌だなあと思います (ID2)」、「夫はありがとうとは言ってくれるんですけど、(中略) 気遣いみたいなのが、やっぱり多少は (中略) 減ってるというか少ない感じ (中略) 夫は結構その、鈍いというか気づかないので、言ってほしいなっていうところもスルーされたりとかするので (ID3)」、「奥さんまだ (自分がした家事に) 感謝してくれるんで、そこまだ頑張れるかな。これが当たり前になってきたら結構しんどいやろうなあ (ID6)」、「家事のやりがいは奥さんの感謝 (ID6)」といった感謝についての発言が得られた。ここから、妻・夫ともに家事への感謝があることが家事へのモチベーションにつながるのではないかと考えられる。感謝の多さにより家庭で感じるネガティブな感情というのは軽減されるのではないだろうか。これは、特に家庭に重きを置いて生活する女性に顕著であることが予想される。先行研究では夫の仕事の多忙さが妻の幸福感の低下につながる可能性が示唆されているが (伊藤・相良・池田, 2006), 夫の仕事が多忙であっても感謝があることで妻の幸福感が高められる可能性もあると考えられた。

男性においても家事への感謝の語りはみられたが、家事の大半を妻が担っている家庭がほとんどであるということを踏まえると、同様の傾向を見出すのは難しいことが予想される。しかし、佐藤 (2013) によると、育児期の母親において夫婦関係がよいほど子育てへの否定感が低く、父親においては夫婦関係がよいほど育児に参与する傾向があると示されている。また、成瀬・有本ら (2009) は、親の育児を進める支援として、父親が家庭と仕事の役割を両立することを肯定的に捉えることができるような働きかけが有効であると述べてい

る。これを踏まえると、家事・育児への感謝があることで、夫婦関係が良くなったり、家庭と仕事の両立を肯定的に捉えたりすることで、父親では家事・育児の時間が増加することが考えられる。今後、育児期の父母における仕事と家庭の両立について考えるにあたり、互いへの感謝というのが鍵と成り得る可能性が示唆された。

以上のように本研究から、男性では仕事、女性では家庭に重きを置いて生活していること、短時間勤務をしている女性において、家庭でのネガティブな状況を仕事で埋め合わせる傾向があることが示された。また、家庭での感謝についての言及から、家庭で配偶者から受ける感謝が、育児期の父母における家庭と仕事の両立において鍵となる可能性が示唆された。

しかし、本研究の限界として、対象者が6名と限られていることが挙げられる。そのため、この結果が本研究の対象者に限られたものでなく、育児期の父母全体に当てはまることであるかについては、今後調査が必要だと思われる。

謝辞

論文作成におきましては、兵庫教育大学池田浩之先生にご指導いただきました。心より感謝申し上げます。並びに、調査の依頼を受けてくださった6名の皆様、研究にご協力いただきました皆様に深謝いたします。

引用文献

- 福丸由佳 (2000). 共働き世帯の夫婦における多重役割と抑うつ度との関連, 家族心理学研究, 14, 151-162
- 福丸由佳 (2001). 乳幼児を持つ父母における多重役割と抑うつ度との関連を示すモデルの検討, お茶の水女子大学人間文化論業, 11-22
- 福丸由佳・小泉智恵 (2003). 乳幼児をもつ父母の多重役割と抑うつ度との関連 補償モデルと分離モデルからの検討, 心理臨床学研究, 21, 416-421
- 福丸由佳・無藤隆・飯長喜一郎 (1999). 乳児期

- の子どもを持つ親における仕事観, 子ども観: 父親の育児参加との関連, 発達心理学研究, 10, 3, 189-198
- 福丸由佳・中山美由紀・小泉智恵・無藤隆 (2006). 妊娠期の妻をもつ夫の仕事役割の状況と妻へのサポートとの関連, 母性衛生, 47, 180-189
- 初塚眞喜子・石田雅人 (1996). 子育てにおける母親と父親のストレス比較—母親の就労形態による差異—, 大阪教育大学紀要, 第IV部門, 45, 1, 31-42
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子 (2006). 職業生活が中年期夫婦の関係満足度と主観的幸福感に及ぼす影響: 妻の就労形態別にみたクロスオーバーの検討, 発達心理学研究, 17, 62-72
- 伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討, 心理学研究, 74, 3, 276-281
- 黒澤泰 (2011). 共働き夫婦におけるスピルオーバーとコーピング—夫婦を分析単位とした視点から—, 応用心理学研究, 37, 29-39
- 小堀彩子 (2010). 子どもを持つ共働き夫婦におけるワーク・ファミリー・コンフリクト調整過程, 心理学研究, 81, 193-200
- 小泉智恵・菅原ますみ・北村俊則 (2001). 児童を持つ共働き夫婦における仕事から家庭へのネガティブ・スピルオーバー: 抑うつ, 夫婦関係, 子育てストレスに及ぼす影響, 精神保健研究, 47, 65-75
- 小泉智恵・福丸由佳・中山美由紀・無藤隆 (2007). 妊娠期の女性の働き方と心理的健康, お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 4, 1-13
- 久保桂子 (2012). 共働き夫婦における子どもの病気時の育児への対処, 千葉大学教育学部研究紀要, 60, 407-412
- 内閣府 (2012). 平成23年度国民生活選好度調査
- 内閣府 (2017). 男女共同参画白書 平成29年度版 第3章 仕事と生活の調和 (ワーク・ライフ・バランス) 第1節 仕事と生活の調和 (ワーク・ライフ・バランス) をめぐる状況
- 内閣府 (2018). 男女共同参画白書 平成30年度版 第3章 仕事と生活の調和 (ワーク・ライフ・バランス) 第1節 仕事と生活の調和 (ワーク・ライフ・バランス) をめぐる状況
- 成瀬昂・有本梓・渡井いずみ・村嶋幸代 (2009). 父親の育児支援行動に関連する要因の分析, 日本公衛誌, 56, 6, 402-410
- 佐藤淑子 (2013). 育児期家族の生活と心理, 鎌倉女子大学紀要, 20, 1-10
- 大坊郁夫・中川泰 (1985, 1996). GHQ精神健康調査票 (30項目)
- 石曉玲 (2015). ジェンダー観からみた育児期の働く母親の家庭・仕事役割間のスピルオーバーおよびディストレス, 家族心理学研究, 29, 99-113

Relation of family and work for parents with preschool children -Through interview investigation-

Lina Ito*, Hiroyuki Ikeda**

*Hyogo University of Teacher Education

**Center for Research on Human Development and Clinical Psychology

In this study, we focused on the positive influence from roles played in the family and the work of parents during child-rearing periods and aimed to clarify the qualitative situation, with six employees who have pre-school children and the work (3 males, 3 females: average age 34.0 years old), and conducted the questionnaire survey and interview investigation.

We examined the concepts of work, "the spillover" of multiple roles of the work and the family, the General Health Questionnaire (GHQ30), subjective well-being and conducted an interview investigation on the rewarding and difficulties of the work and the family. As a result, it was shown that men emphasize work, while women emphasize family. In women who work for a short time, scores high on negative spillover from family to work, and compensation from work to family, it was shown that they tend to compensate for negative situations at home with the work. Furthermore, it was suggested that appreciation received from the spouse at home is likely to be a key in compatibility of family and work for child-rearing parents.

Key Words: spillover, compensation, child rearing period, subjective well-being